

地方創生と伝統行事 ～土地の記憶を行動で共有する～

④「牛の角突き」(後編)

上席専門職 平沼 浩

目次

- | | |
|--------------|--------------|
| 1. 被災からの地方創生 | 4. 復興のビジョン |
| 2. 全村避難の記憶 | 5. 平成30年の初場所 |
| 3. 全頭救出の記憶 | 6. まとめ |

1. 被災からの地方創生

本誌156号(2018. 4)の前編では、新潟県長岡市山古志^{やまこし}の伝統行事「牛の角突き^{うしつのつ}」について、開催地の環境と行事の歴史、「引き分け」を旨とする特徴を紹介した。

2004(平成16)年10月23日、ありふれた土曜の夕方を突然襲った新潟県中越地震によって、恐怖と不安にみまわれ、日常を根こそぎ奪われる非常事態に直面しながら、旧山古志村の人びとはその半年後には、仮設住宅の暮らしの中で仮設の闘牛場を造り、伝統の「牛の角突き」を例年と同時期に催し続けた。後編では、その意味を中心に考えてみたい。

周知の通り、震災の翌24日から25日に行われた約2,200人の全村避難は、自衛隊をはじめとするヘリコプター部隊を大規模に動員した前例のない救出劇だった。



闘牛を「引き分け」にする一瞬を見計らう勢子(闘牛士)。右袖に「感謝」の2文字。頭部を保護する伝統の鉢巻。

その数日後の10月末には、着の身着のまま避難した住民に、異例の措置が取られた。避難指示が解除できない場所への1世帯につき1人2時間限定で許された自衛隊ヘリコプターによる一時帰宅である。その際に救われた愛犬マリと3匹の子犬のエピソードは、3年後に公開された映画『マリと子犬の物語』(2007年)の題材ともなった。

しかし、救出劇はそれで終わらなかった。山古志の人びとは、生き残った牛や錦鯉を民間のヘリコプターを頼んで救出した。

こうした一連の出来事は、後から振り返れば常識を覆す奇跡の連続だった。

もともと、旧山古志村は、翌年4月には平成の大合併により長岡市との合併が予定されていた。それが突然、震災の災禍に直面し、政府、新潟県、同じく被災した長岡市や周辺自治体、民間の支援を得ながら、最終的に故郷の再生に取り組んだ。それは、高齢化と過疎化の道を辿った中山間地が、被災のどん底から地方創生に挑戦するような奇跡だった。

小さな山里の住民の思いを政府も自治体も支援し見捨てなかった。山古志復興は、十数年経った今でも色あせない中山間地の貴重な前例でもある。断片的ながらその幾分かでも紹介できればと思う。

2. 全村避難の記憶

(1) 阪神・淡路大震災の教訓

2004（平成16）年10月23日土曜日の午後5時56分。山古志村の南東に位置する川口町を震源とする直下型地震は、最大震度7を記録し、山古志村では震度6強を記録した。

地震発生 of 4 分後、政府は内閣府に対策室を立ち上げ、関係省庁の職員11名を自衛隊のヘリコプターで新潟県庁に派遣した。国土交通省北陸地方整備局から職員が道路の被害状況を把握するために出発したのは、地震発生 of 10 分後だった。新潟県は午後6時20分に対策本部を設置、午後9時5分には自衛隊に災害派遣を要請し、小千谷市と十日町市に災害救助法の適用を決定した。自衛隊第12旅団は地震発生直後からヘリコプターを飛ばして上空から情報収集を始めていた。

こうした行政の初動の速さは、阪神・淡路大震災の教訓によるものだろう。ちなみにその日の新潟県は、知事選直後であり、42歳の全国最年少知事の就任を2日後に控えていた。

(2) 全村避難、村長の決断と決意

最後の山古志村村長であり、昨年8月に亡くなられた長島忠美氏は、震災から3年が経過した2007（平成19）年の年末、長岡市の仮設住宅から最後の住民帰還の目途が立った頃、それまで語ることを控えていた震災当時の事を著書『国会議員村長 私、山古志から来た長島です』に残している。サポートを手がけたのは、『奇跡のリンゴ』等で知られるノンフィクションライターの石川拓治氏である。

長岡市内に下宿をして通った高校時代の長島氏のあだ名は、僻地から来たというニュアンスを含む「ヤマコシ」だった。東京で就職した後、Uターンで村に帰ると推されて村議に、やがて村長になった。子どもたちに広い世界を知って欲しいと修学旅行に予算をつけて中学生を海外に行かせた。被災後は背中に

山古志と描かれた防災服を着て、関係省庁を幾度となく頭を下げて回った。村が長岡市と合併してからは市の復興管理監を務めていたところ、郵政解散の折に推されて国会議員になった。地元では、国会議員になってからも「村長」の愛称で親しまれた。著書のタイトルには、そうした長島氏の経歴が反映されている。

どのような状況下で、震災の翌日に全村避難は決行されたのか。長島氏の著書から状況を大まかな時系列で整理してみる。

○10月23日震災の夜、孤立する村

夕方の地震発生後、村は度重なる大小余震の波状攻撃に見舞われた。家屋や樹木の倒壊、山斜面の崩落。電気、水道、電話、道路と、ライフラインは悉く絶たれた。役場の緊急防災無線もダウンしていた。

その日、村長は家にいた。クルマも使えず、夜間に徒歩の移動も困難という状況で、懐中電灯を頼りに、微かに携帯電話のアンテナ表示が反応する山の上から通じない電話を掛け続けた。バッテリーが無くなる度にクルマで充電を繰り返した。ようやく県庁に電話が通じたのは、午後11時過ぎだった。その時に発した救援要請が、県災害対策本部への村からの第1報だった。既に被災から5時間が経過し、孤立した村の住民は集落ごとに1箇所にも固まり恐怖と不安の夜を過ごした。

○10月24日早朝、救援を待つ村

夜明け前の午前4時30分頃、県知事から村長の携帯に電話が入った。「何が必要ですか」と聞かれ、「自衛隊のヘリをよこして下さい」と答えたところで電波は途絶えた。

意思が通じたことを信じて着陸場所を準備するために役場の駐車場へ向かうも、土砂の崩落で駐車場は失われていた。午前6時頃、山古志中学校のグラウンドに居合わせた役場

職員3人を前に「山古志村災害対策本部の設置」を宣言し、石灰でグラウンドに円を描き着陸場所の目印を作った。

やがて自衛隊だけでなく警察や消防のヘリコプターが派遣されてきた。ケガ人の搬送を優先した。午前10時頃、14の集落間を繋ぐ道路も、外から山古志へ向かう道路も寸断されていることが分かりはじめ、村が完全に孤立していることを村長は痛感した。

○10月24日昼前、連隊長の到着

群馬・新潟・長野・栃木の防衛と災害派遣を任務とする自衛隊の第12旅団は、既に前夜から中越地区に第2普通科連隊を派遣していた。県災害対策本部に出席していた第12旅団の旅団長が山古志村に派遣したのは第30普通科連隊だった。

昼前に到着した連隊長は、初対面の村長に「何かお困りですか。何でもやりますよ」と申し出た。村長は「住民を助けてください、みんなを生き延びさせてください。何とかお願いします」と訴えた。

間もなく、連隊長は搭載してきたオフロードバイクで状況を把握させたが、オフロードバイクでも走破不能な状況で、徒歩での状況把握には時間がかかり過ぎた。陸上の移動は困難であると判断された。

○10月24日昼、連隊長から旅団長への報告

ライフライン復旧の目途が立たないうえ、水や食料を空輸しても、既に余震に怯えながら住民は外で一晩を過ごし、高齢者は衰弱し

ていた。翌25日の予報は雨、地盤の緩みから被害は拡大する恐れがあった。

連隊長は、県災害対策本部に詰める旅団長に次のように報告したという。

「この状況では、陸からも空からも、ライフラインを維持するのは無理です。それよりもみなさんにどこか安全な場所に移っていただいて、そこでライフラインを維持するという方法しかありません。そうしないと時間が経つにつれておそらく犠牲者が出ます」

この報告は、住民約2,200人をヘリコプターで輸送する前代未聞の救助活動を意味した。その困難性は、自身がヘリパイロット経験を持ち、国内随一のヘリコプター運用能力をもつ第12旅団を率いる旅団長に当初難色を示させたという。

○10月24日午後1時、村長の決断

「そんな方法があるんですか」と村長は、半信半疑で連隊長の話を聞いた。

連隊長は、次のように答えたという。

「できるかどうかについては、正直に申し上げて、要請があれば全力を尽くします、としかお答えできません」

シビリアンコントロールの原則と災害派遣の性格から、実施はあくまで行政の判断に委ねられた。

午後1時、村長は3人の役場職員を集めると、村長として全村避難を決断したと伝えた。村議会を招集する余裕もなく、議長には事前に話をしたが聞かなかったことにしてくれと伝え、責任を負う覚悟を決めた。

被害状況（中越地震被災地全域）

	人的被害				住宅被害						非住宅被害	建物火災
	死者	行方不明	重傷	軽傷	全壊		半壊		一部損壊		公共建物 +その他	
単位	人	人	人	人	棟	世帯	棟	世帯	棟	世帯	棟	件
計	68	0	633	4,172	3,175	3,138	13,810	14,089	105,682	112,856	41,737	10

消防庁「平成16年(2004年)新潟県中越地震(確定報)」より作成

出典:『中越地震から3800日』ぎょうせい

○10月24日午後、一部避難が始まる

ヘリコプター運用にかけては国内随一の第12旅団でさえ、初めての大規模な空輸作戦だった。自衛隊の他に警察、消防、海上保安庁のヘリコプターも協力体制を組んだ。

夕方までに、山古志中学校に集まることのできた200人が先行してヘリコプターで輸送された。この間に、小型のヘリコプターが各集落へ水と食料を届け、翌朝からの避難の趣旨説明と併せて必ず迎えに来ることを伝えていた、はずだった。

○10月24日夕暮れ、パニックを起こした集落

「村長、パニックが起きています」と、ある集落の役場職員が山を越えて走ってきた。

聞けば、山古志小学校に避難していた集落の人びとが、ヘリコプターが飛び交っていたのに自分たちのところには来てくれず、自分たちは見捨てられたというのだ。

実は、山古志小学校は災害時の緊急ヘリポート指定から除外されていたためにヘリコプターは1機も着陸していなかった。

余震の続く中で不安な一夜を過ごし、自分たちが見捨てられたと思えばパニックになるのは自然なことで、村長は自分が出向いても不安解消はできないと判断した。むしろ集落の人たちが夜間に動き出すことを懸念した。

○10月24日夜、1回だけ飛ばしてください

夜間のヘリコプターによる救助活動は、二次災害の危険からまず行われない。そうした事情を知る由もなく、村長は人道的配慮の一点張りで県庁と2時間にわたる交渉を続けた。

傍らで見かねた連隊長が「自衛隊がやってくれると言ったらいいですか」と聞けと助け船を出してくれた。県庁の職員もまさか自衛隊がOKを出すとは思わず了承した。あとは、連隊長が旅団長から1回だけという約束で了承を取りつける大変な役目を負った。

著書は、無茶なお願いだったと振り返る。

夜間の航行離着陸では、パイロットは特殊な暗視装置を装着して操縦するため、視野が極端に狭くなる。頭を左右に振りながら視界を確保する特殊訓練を積んだエース級パイロットにしかできないことだった。また、一般的に学校校庭は、災害対策用に緊急ヘリポート指定を受けており、山古志小学校が指定外となるからには電線や樹木等の危険な障害物が懸念された。

旅団長は連隊長に次のように釘を刺したという。

「ウチのパイロットは昨日の夜から偵察で飛び続けて、ヘロヘロになっているんだ。いいか、1回だけだぞ。そして絶対に、もう1回飛べというな。命令でなくても、上司のお前が言えば、機長は無理をする。無理をすれば必ず墜ちる。機長の技術と判断が正しいんだから、すべてを任せてやれよ」

○10月24日夜、1回しか飛ばない約束が

山古志中学校のグラウンドにヘリコプターは2機やって来た。パイロットはSF映画に出てくるような暗視装置を顔に装着していた。連隊長が乗り込み、村長は着陸不能なら自分が住民説明のためにロープで垂直降下すると話して乗り込んだ。1回しか飛ばない約束だ

仮設住宅整備戸数（中越地震被災地全域）

市町村	長岡市	うち旧山古志村	見附市	小千谷市	川口町	魚沼市	十日町市	柏崎市	刈羽村	合計
建設戸数	1,809	632	103	870	412	30	153	44	33	3,460

新潟県庁「応急仮設住宅入居者の推移（平成17年3月～平成19年12月）」より作成

出典：『中越地震から3800日』ぎょうせい

から、パニックになった群衆のうちから搭乗できるのは、せいぜい25人だった。

「連隊長、ものすごく明るい場所が見えます」と暗視装置を着けたパイロットが声を上げた。村長から連絡を受けた村人が、ありったけのクルマのヘッドライトや消防団の投光器を集めてグラウンドを照らしていた。旅団長の読み通り、高圧線と桜並木が邪魔をしていた。照明が無ければ見えなかった。

ヘリコプターから降り立った村長は、すぐに怒りの声に取り囲まれた。1回しか飛ばない約束だから25人しか運べないこと、あとは翌朝になることを伝えなければならなかった。

パイロットは連隊長に進言した。「これだけ明るいなら、燃料が尽きるまでは、何回でも降りられそうです。ピストン輸送やってみましょうか？」

「無理していないか？」と聞く連隊長に、パイロットは顔を輝かせて「ぜんぜん、無理してないです」と答えたという。

2機のヘリコプターによるピストン輸送で山古志小学校に集まっていた約250人は、その夜のうちに長岡に避難した。

○10月24日深夜、本番に向けた準備会議

翌朝からは、残った住民が長岡へ移動する。村長は山古志小学校から懐中電灯を頼りに徒歩で役場に向かった。役場には10人ほどの職員が集まっていた。長岡の避難所の受け入れ準備のため、まず助役を含めた半分が長岡に飛び、助役が責任者として長岡にいる12人の役場職員とともに受け入れ準備をする段取りをつけた。

日付が25日に変わる頃、村長は山古志中学校に辿り着くと、自衛隊の設営テントで輸送作戦の会議に参加した。警察や消防から派遣された職員もいた。会議を仕切ったのは連隊長だった。能力や乗員人数の異なるヘリコプターを各集落の状況に応じてチーム編成す

る。村の地形や集落の人数を正確に把握していた村長の意見が会議の軸になった。会議の参加者は、組織の面子や垣根を捨て、できることと、できないことを率直に述べ合った。

○10月25日午後3時、全村避難終わる

25日早朝から、自衛隊、警察、消防、海上保安庁の機種も大きさも違うヘリコプターが空を覆うほどの数で現れた。不安な夜を二晩過ごした住民が、着の身着のままで乗り込んだ。飛行機にも乗ったことのない老人が、自分の孫くらいの若い自衛隊員に背負われ、恐ろしげな乗り物に乗った。

この朝、村長は偵察用ヘリで新潟県庁に向かった。実行に移してくれた対策本部を訪ね県知事に頭を下げた。そして長岡に飛び、自らも被災地であるにもかかわらず、村民受け入れに全面協力してくれた長岡市長に頭を下げた。無線機で頼みごとをするたびに感謝は伝えていたが、本当の感謝は面と向かって頭を下げて伝えるものだと思っていた。長岡では、受け入れ準備にあたる役場職員と打ち合わせを終え、山古志中学校に戻った。

戻った村長に連隊長は、長岡にオペレーションの拠点を移さないかと声をかけた。これに村長は次のように返したという。

「指揮所をどこに移すかは、自衛隊の方の判断だから、それをとやかくいうつもりはありません。ただ、故郷を離れるということは、私が決めたことなんです。その私が先に逃げるわけにはいかない。最後の1人が無事に避難するまで、私は村を出るつもりはない。でもあなたが指揮所を長岡に移すと、私と自衛隊の接点がなくなります。このオペレーションは自衛隊なくしてはできません。どうしたらいいでしょう」

悩む村長に連隊長は「すいません。忘れてください」とだけ告げた。

午後3時に避難輸送は完了した。家屋倒壊

による犠牲者2人の亡骸も一緒に運ばれた。村長と連隊長を乗せた最後のヘリコプターが村を離れたのは、午後5時過ぎだった。

○全村避難を終えた述懐

著書には、全村避難を終えた連隊長と村長の述懐がある。連隊長はこう振り返る。

「奇跡のような1日だった。ひとつの事故も起きていなかった。いつ空中衝突が起きても不思議はなかったし、隊員が落ちたり、行方不明者が出てもおかしくなかった。同じことを同じ条件でもう1回やれと言われても、同じようにはできなかつただろう」

村長は全村避難を終えた午後3時から情けなさや絶望感で涙が止まらなかったという。

「絶望しながらも何とか踏みとどまることができたのは、我々を助けてくれた人たちがいたからです。自分の危険もかえりみず、彼らはただ村人を助けることだけを考えてくれました。あの2日間、彼らはほとんど寝ていなかったんじゃないかと思います。食事をする時間もロクになかった」

部下を危険にさらさなければならなかった連隊長、災害対策本部で見守っていた旅団長に対しても、「彼らのような人たちにとって、それがどれだけ重い決断だったことか」と振り返る。

「ヘリコプターに乗り込むとき、はっきりこう思ったのを覚えています。俺は絶対にこの村を捨てない。必ずここへ戻ってきて、緑の村を取り戻す。自分にそう約束したんです。その約束を果たすことが、我々を助けてくれた人たちへの本当の恩返しであり、私を信じて村を離れる決断をしてくれた村民への責任でもある」

(3) 一時帰村

全村避難が終わったその日、ニュースを通じて、しばらくは村に帰れそうもないと知る

や、避難所を抜け出して危険を冒してまで、牛の元へ出掛ける人がいた。

また、避難所では、何とか大切なものだけでも取りに帰らせてほしいという声も上がっていた。

○無理を押しての一時帰村

全村避難は、避難勧告よりも拘束力の強い避難指示によって行われたが、絶対に村へ行くなと命令する強制力は無かった。

村長は県と住民の一時帰村を交渉した。危険だから避難してきたばかりの場所へ、住民を一時的にでも帰せないかという無理を承知の相談だった。ヘリコプターの他に手段はないから、並行して自衛隊とも交渉した。連隊長は、「前例のないことで確約はできないけれど、県庁からの正式な依頼があれば」と言ってくれた。これをもって、県庁と2日間にわたる交渉を続けた。

最終的に実現したのは、自衛隊のヘリコプターによる1世帯につき1人2時間限定の一時帰村だった。10月29日から14集落中12集落で実施された。

○2度目の一時帰村

2度目の一時帰村の声は、自衛隊員の方から上がった。倒壊してメチャメチャになった家の前で、お年寄りが「せめてお位牌だけでも取ってきたかった」と泣いていた。そうした光景を目撃した隊員たちは、2時間では目的を果たせないと感じたのである。

連隊長は滞在時間の延長を県と調整した。旅団長と相談し、ヘリコプターの台数を増やした。滞在時間が延びれば危険度が増すことから、老人に安全係の隊員をつけることにした。隊員たちは、倒壊した家に入るためのボールやチェーンソーを自発的に用意した。

あるマスコミから、「それは自衛隊の仕事なのか」と聞かれた連隊長は、「自分は復興支

援と思っています」と答えたという。

3. 全頭救出の記憶

震災から約10年が経過した頃、前例のない全村避難の後に行われた前例のない牛の救出を、社会学者の植田今日子氏は、共著『災害文化の継承と創造』（2016）および著書『存続の岐路に立つむら』（2016）に詳細に記している。

植田氏は、山古志の牛飼いの方々が、命の危険を冒してでも牛を救おうとした心情を汲み取り、また、仮設住宅に暮らす非常事態下で例年通りの時期に伝統の「牛の角突き」を催した意義を考察している。

(1) 全頭救出の記憶

まず、牛の救出は如何に行われたか、植田氏の著書から事態の推移を整理してみる。

○全村避難の翌朝から牛を救うために

全村避難に際して、牛飼いの人たちは牛舎に繋いでいた牛のロープを全て切って山古志を後にした。それは、生き残った牛を少しでも長く生かすための切ない行為だった。

全村避難の翌朝から、危険を冒して山古志へと通い続け、牛の救出過程の先頭に立った人がいた。山古志闘牛会の会長を務める松井治二氏だった。

道路が寸断されていたため、クルマで4時間をかけて柏崎、松之山と大きく南に迂回し、広上、堀之内を経て可能な限り村内に近づける地点まで向かうと、そこから徒歩で中山峠を越えて通った。朝方は皆が寝静まった避難所の体育館を抜け出し、帰りは夜も更けて誰もが寝静まった頃に帰ってきた。トイレに起きたふりをして、弁当と着替えを積んでおいたクルマに乗って山古志へ向かった。

こうした行為は、同じ避難所生活をする村の人からも、役所からも理解を得るのは困難

なことだった。「この非常時のときにね、支援してくれる日本人たち前にしてそういうことはできないよって、国も支援してくれてるのにつて」と言われた。

しかし、会長にとって、牛を助けに行くのは自らを助けることと同じくらいに、当たり前のことだった。

「でも生きてる自分たちと同じ者をね、見殺しにしていいいわけねえかやと。牛を助けるんじゃないんだ、やることは自分を助けるがだよと。もう雪というのは1ヶ月後には間違いなく降るんだからそんな悠長なこと言ってもらえないんだよと。ここでやらないきゃ先はないんだよと」

せつかく生き延びた牛も、そのままでは間もなく豪雪の中で息絶えるのは明白だった。

○救えないならば、安楽死を

賛同してくれる何人かの牛飼いの仲間はいしたが、とても大規模な牛の救出を展開できる状況ではなかった。会長は役所に対し、助けることが無理ならば自分が責任をもって安楽死させて葬るからと、薬殺許可を申し入れた。

「今見殺しにして、今雪のなかでさまよう姿をね、考えてみてくれと。わたしも助けたってしょうがねえ、やり場もねえんだからってそういう気は一度はしたけど。でもそういう牛が春になって雪の下からでてくる。これがあんたの牛だよって耳標がついているからわかるよって。でもみんな1箇所を集めて処分するんだったらまだね。だから放した牛、一緒に捕まえてくれやと。そして葬ってやればいいと。放した牛、助けたあとは俺が責任をもつと」

生き残った牛が、苦しんで死ぬくらいなら安楽死させたいという提案は不許可になった。ところが思いがけず、会長の啖呵をニュース映像で見た県内新発田市の畜産家から、「お前の牛だったら何頭でももってこい」と

引き受けの申し出が来た。

○大昔の人になればいい

それから、10数名の牛飼いの仲間とともに、徒歩で中山峠を越えて救出に入った。1度目の救出に要した時間は実に丸3日間だった。河道閉塞による水没から牛を守るために、牛を峠の中腹まで引き上げ、ホームセンターで用意した道具を使い、それから1日かけて、ナタ、ノコギリで木を切り、シャベル、スコップで道を作り、崖を這い上がった。

「ヘリがとかなんとかというさ、うちにそういう能力とか力はない。で、じゃあ大昔の人になればいいと。昔は岩手から、牛が隊列組んで来たじゃねえかと。今度はうちらがそれをやればいいじゃねえかと。道がなければつくればいいと。中山峠というトンネルの上を越えたんです、3日かけて」

○民間ヘリコプターの加勢

11月も初旬を過ぎる頃、民間ヘリコプターの加勢を得られることとなった。

山古志肉牛生産組合のメンバーに加え、闘牛会の仲間、県職員、村役場の職員、長岡市内で牛を飼っている人など、手を貸してくれる仲間は35人ほどに増えていた。

準備のために山古志に入り、沢を歩き、無事である牛を捕まえては集めてガードレールなどに繋いだ。集められた牛は、ヘリコプターで長岡市の東山ファミリーランドまで避難させる。この作戦で貫かれた原則は「全頭救出」だった。生き残った牛は1頭たりとも残さず助ける。つまり、持ち主が拒んでいたとしても、牛を運びだし、引受先の牛舎を捜して引き渡すまでを含む作戦だった。

しかし、ヘリコプターが近づくには、あまりに危険な場所に取り残された闘牛がいた。若手の組合員が、パイロットと牛をおびき出す人の安全のために断念しようと進言する

と、会長は笑ってこう告げたという。

「おまえバカかと（笑）。100頭助けても1頭残したら意味がないんだって」

行政から「あの1頭はあきらめるように」と予め伝えられていたパイロットに、「なんとか助けてくれ」と頼み込んだ。協力してくれたパイロットの技術と牛を誘い込む勢力（闘牛士）たちの技量で牛は無事に救出された。

11月25日、生きていた牛は1頭残らず救出された。遅れていた降雪に間に合った。

○全頭救出の結末

震災前の旧山古志村には、主に肉牛が千頭あまり、闘牛が100頭ほど飼育されていた。このうち、牛舎の倒壊等により肉牛130頭あまりと闘牛21頭が絶命していた。

救出された牛は、東山ファミリーランドから、いったん近くの長岡家畜市場に繋がせてもらい、その後は受け入れを表明してくれた新発田市の畜産家の他に魚沼市や岩手県などに預かり先を捜した。牛を預かり先に運びきるまでに1か月間を要した。

救出された牛のうち、肉牛は出荷状態になるまで肥育され、全て売り切った。売上金は、避難生活中に牛の世話をしたか否かにかかわらず、飼料代等の費用を差し引き、耳標を手がかりに持ち主のもとへ届けられた。

ヘリコプターの輸送経費は1時間当たり



ヘリコプターで救出される牛。
山古志闘牛場のフォトギャラリーより。

140万円を要した。ヘリコプターから吊り下げて牛を運ぶために急ごしらえで用意したコンテナは重量1 t、1度に運べる牛は2頭程に過ぎなかった。ヘリコプターは山古志と東山ファミリーランドを440回余り往復したが、結果的にその輸送経費は、山古志の牛飼いの方々には請求されなかった。畜産関係の義援金で賄われたからだだった。

(2) 非常事態下の伝統行事

仮設住宅に暮らす非常事態の下で「牛の角突き」は、例年通りの時期に開催された。まず、その経緯と理由を前出の植田今日子氏(共著『災害文化の継承と創造』)の問題意識をもとに掘り下げてみたい。

○仮設闘牛場での「牛の角突き」

闘牛用の雄牛は筋肉質に育て上げるため、肉質が硬く売り物にはならない。使役動物でもあった昔とは違い、伝統行事のハレ舞台のためだけに飼育される。

当然ながら、状況は「牛の角突き」を行うには厳しかった。村外に闘牛場を確保しなければならず、少くない義援金が支出された牛の救出のあとで、行政は「お祭り」をやるわけにはいかないという立場だった。

こうした状況を山古志闘牛会は、会長を筆頭に変えていった。提案はこうだった。

「役所はやろうという気持ちはあってもやれないよって。今やれるわけないと、日本中をこんだけ騒がせて、闘牛再開なんてやれないよと。でも、やれないなかでもやりましたよ、やるっていうその意思で礼を言おうじゃねえかやと」

この提案に当時の長島村長が理解を示してくれ、闘牛場の村外造成が動き出した。長岡市の東山ファミリーランド内に仮設闘牛場の場所が確保された。例年通りの5月4日に向け、仮設工事は重機を使える闘牛会のメンバ

ーが担うこととなった。

震災の年の冬は、稀にみる豪雪に見舞われた。行政からは雪による延期を進言されたが、闘牛会はあくまで例年通りの日程5月4日を譲らなかった。救出された闘牛のうち25頭と仮設住宅から集う勢子によって「牛の角突き」は執り行われた。

ところが、牛たちの調子は例年通りではなくなっていた。会長はこう振り返る。

「亡くなった牛も結構いたけども、あとで処分してくれていう人もいた。10頭くらいかな。ただそのなかで助けたけども闘う意思を失ってしまった牛もいたわけです。その年大会出しても、それまでよくやってた牛がさあ、全然だめになったのもいたから。震災でびっくりしたんだろうね、精神的に。それから一ヶ所ですつといたので、それまでとの環境の違いということですね」

牛も無理を押しての遂行だったが、伝統の「牛の角突き」は、被災という非常事態下にも途絶えることなく、後に山古志闘牛場が再開するまで仮設闘牛場で行われた。

○理由は、守ったのではなく守られた

植田氏の問題意識に沿って、事態を動かした原動力を掘り下げてみたい。

まず、伝統行事だけのために飼われた牛はいわば「不経済」な動物である。そして、大災害の緊急状況下で行われる伝統行事は、「沈みがちな気を紛らわせるもの」とか「復興のためのまとまりを呼びかけるもの」として扱われがちである。しかし、同氏が指摘するように、生活再建も不透明な災禍の中にいた人びとが仮設の闘牛場まで造って遂行した「牛の角突き」は、一時的に気を紛らわせるとか、内外に復興をよびかけて元気づけるといった解釈を許すような範疇を遥かに逸している。

そこで同氏は、そうまでして遂行した理由

を当事者たちに尋ねている。返ってきた答えは、「自分たちは伝統文化を守ったのではなく、むしろ守ってもらった」だった。

闘牛会の会長は、こう答えていた。

「伝統文化を守るためって、みんながね、こんな負担をしてまで『角突き』やらないです。伝統が守ってくれるから帰ってきた。貧乏であってもこの子ども育てるためにがんばるが、と思うのと一緒に、この牛を育てるためにがんばるというふうになってる」

肉牛も闘牛も飼育する別の方は、こう答えていた。

「最初は休まないでやったという思いの方が強かったんだけどねえ、伝統文化っていうかねえ。でも2回、3回、6月、7月こうやってるなかでねえ、ちょっと違うぞっていう感じがうまれてきたっていうかねえ。これはこちらが伝統文化を守って仮設（住宅）の中でも自分たちの村がどうなるかわからんときにも守っているんだっていう思いは、ある意味思い上がりかなっていうか、このことで力をもらってるっていうか。それぞれの地域っていうか地方っていうか集落っていうか『角突き』じゃなくてもいいことやね。そうだったのっていうのは人間が窮地に立たされたときに支えになるものなんだっていう思いがまあ、生まれてきたよね。『牛はどうなるかわからんけども』なんていってたら今の姿があったかなっていうね。こんな中でも『角突き』できたんだから、その気になればやれないことはないって広がっていくわけじゃないですか。ああやっぱりその、牛たちを守るんじゃなくてそういうふうに文化に守られてるのかなっていう感じだわねえ。それ自体はなにもお金になるわけじゃない。むしろ出費してる。でもそういったのに向かってくね、力をくれる」

やはり、注目すべきは、「守ったのではなく守られた」という逆説的な説明である。

(3) 非常事態下の伝統行事がもつ可能性

植田氏は、非常事態下で「牛の角突き」が遂行された意義を述べるにあたり、結論のタイトルに、「避難者が『有能』であるために」とつけている。論旨を抜粋して紹介したい。

「(略) 牛の救出や世話が被災者にのしかかったというよりは、牛を無事に運搬し、牛舎や餌を手配し、その後も牛が健康を保てるように養い、さらに闘牛場を設置して『角突き』の催行を実現させるための能力（capacity）が、勝手にわからない環境で試行され続けた。（中略）このような試行錯誤によって、人びとは経験を介して培った技能を被災後も見知らぬ環境で発揮しつづけることになった。そして一度達成された闘牛は『定点』となって、今後の肉牛や闘牛の肥育環境、闘牛の開催場所についても見通しを明るくしたのである。（中略）少なくとも、『角突き』を絶やさなかった旧山古志村の牛飼いの人びとは、突如として不慣れた生活空間に暮らすことになったとしても、当然のように繰り返されてきたルーティンを曲がりなりにも試行することで、人びとが培ってきた能力が無効化しない環境を切り拓く可能性を示している。それは『“角突き”じゃなくてもいいことやね』という語りにあったように、かならずしも牛という手のかかる家畜を伴う祭礼のみならず、ハレのルーティンあるいはケのルーティンとして、人びとの手に受け継がれてきたあらゆる慣行や行為にそなわっている可能性がある」

ここでいう「ハレとケ」は、民俗学者の柳田國男が提唱した概念で、ハレとはハレの日等の「非日常」を指し、ケとはハレと表裏をなす「日常」の世俗諸事を指している。

植田氏は、非常事態下で遂行された伝統行事に、それと表裏をなす日常の能力や手間が動員されたことが、非常事態の先にある日常を取り戻す自信や展望に繋がるという可能性

を見出している。

*松井治二氏は、2015（平成27）年8月に亡くなられた。
同年10月、山古志闘牛場では「牛じいありがとう 松井治二会長追悼牛の角突き」が行われた。（山古志・牛の角突き公式ブログより）

4. 復興のビジョン

震災から約10年が経過した頃、新潟県中越地震に向き合い復興を考えてきた「復興プロセス研究会」の学者たちが、復興のプロセスを『中越地震から3800日』（2015）にまとめた。そのポイントを掻い摘みながら、現在にも繋がっている復興ビジョンに注目してみたい。

中越地震からの復旧・復興では、1995（平成7）年の阪神・淡路大震災から知見を受け継ぎ、同じ中山間地に被害を生じた1999（平成11）年の台湾大地震からも学び、中越地域に最適な復旧・復興方策が模索されながら展開された。中山間地の大規模被災は事例も乏しく学問的な蓄積も無く、学者たちは、この災害は我が国の中山間地の息の根を止める最初の地震となる可能性があったと指摘している。

(1) 最初の2か月

震災当初、中越地域の7市町村において61の集落が孤立した。避難所の避難者数は、震災発生から3日後の2004（平成16）年10月26日をピークに10万3,000人を超えた。

まず、雪国の特性として、豪雪襲来までに急ぐべきことは、大きく分けて3つあった。

- ① 応急仮設住宅の建設、ライフライン応急復旧、除雪体制の確立
- ② 河道閉塞の危険性除去
- ③ 首都圏―新潟の物流の確保

11月下旬から始まった仮設住宅入居が12月下旬までに完了し、先行地域でインフラ復旧が急ピッチで進んだ。避難所の避難者数は、翌12月末には0人になった。

山古志村の河道閉塞の危険除去作業と国道復旧作業は、新知事の要請で国交省の直轄事業となった。

首都圏と結ぶ道路と鉄道は、トンネルを含め約2か月で復旧した。

(2) 復興ビジョン

次に急がれたのは復興ビジョンだった。

2004（平成16）年12月27日、新潟県は第1回の「新潟県中越大震災復興ビジョン懇話会」を開催した。招集メンバーは学識経験者、民間諸団体代表、被災自治体の市町村長だった。

翌2005（平成17）年3月1日、「新潟県中越大震災復興ビジョン」は公表された。そこでは、新しい地域イメージとして、「最素朴と最新鋭が絶妙に組み合わせり、都市と川と棚田と山が一体となって光り輝く中越」が掲げられた。単に旧に戻るのではなく、地域資源を活かした産業や交流を生み出し、「安全・安心な地域づくり」とともに「持続可能な中山間地づくり」を将来像として示した。

このビジョンに基づき、地元市町村はそれぞれにシナリオ（復興計画）を作り、被災者もまたそれぞれに地元シナリオ（集落復興計画）を作るという図式ができた。

一方、山古志村では、2004（平成16）年12月半ばには「山古志復興ビジョン」の作成に着手していた。前出の『国會議員村長 私、山古志から来た長島です』によれば、村長は高齢者の多い住民にとって、仮設生活は2年が限界と考え帰村目標を2年と示し、自称日本一注文の多い村長に徹していた。

これと並行し、山古志の復興支援のために、「山古志復興新ビジョン研究会」が、同じく12月半ばに立ちあがった。事務局は、社団法人北陸建設弘済会と新潟経済同友会だった。県内の産学官有識者を集めた同新ビジョン研究会は、山古志村と共同で翌2005（平成17）年1月から2月中旬に山古志村民を対象に復

興に向けたアンケート調査を実施した。

回答はほぼ全世帯から回収され、帰村希望世帯は温度差こそあれ9割を超えた。復旧・帰村に向けた見通しは不透明だったにもかかわらず、村民は「山古志の魅力」を肯定し、「歴史や伝統文化、自然などの山古志の資源」を復興に活かせると答えた。

1月上旬から降り出した遅い雪は、19年ぶりの豪雪となった。故郷の雪降しもままならない状況で、仮設住宅の雪降しに追われた。ところによっては、自衛隊に出動要請をせざるを得ない状況に追い込まれていた。まさに「泣きっ面に蜂」の状況下のアンケートだったが、その結果は当時の長島村長の背中を強く押し、復興計画の作成に弾みをつけた。

山古志村は3月中旬に作成した「復興ビジョン」に、自分たちが育んできた文化と生活に誇りを持ち、中山間地地域の復興モデルとなることを掲げた。

他方、「山古志復興新ビジョン」は、公式には5月に公表されたが、中間報告は3月中旬にはできていた。同新ビジョンには、帰村後の「交流人口の拡大」をキーワードとした復興コンセプトがあげられている。表現の違いはあるが、山古志村の「復興ビジョン」も同様に都市からの来訪者等との連携を将来コンセプトに掲げていた。

震災から4か月余りの時期には、山古志村の課題は山積していたはずである。「山古志復興新ビジョン」が描くロードマップも資料分量は薄くはない。

しかし、その時期に将来を見据えて「交流人口の拡大」をあげていたことに注目したい。

(3) 復興を何で計るか

仮設住宅2年目の冬も豪雪に見舞われた。

山古志の避難指示が全て解除されたのが、2007（平成19）年4月1日、仮設住宅の退去完了は同年12月31日である。

実際の帰村人口は、震災前の65%だった。それから10年が過ぎ、定住人口は半減し、高齢化率は上昇した（37.0%→47.7%）。

『中越地震から3800日』の後段には、「復興は何をもって計測し、いかに成否を判定するか」という問題提起がなされている。抜粋して紹介したい。

「昨年10月、震災から10年が経過し、旧山古志村でいえば人口は文字通り半減した。ある意味『予定通り』といってもいいだろう。新聞を中心にメディアの報道も、おおむね『人口半減、復興半ば』という論調が大勢を占めた。しかし、筆者ら現場に近い支援者の見立て、地域住民の復興感、総じて『復興した』という意識が強い。（中略）人口は半減した。しかし、地域の問題に主体的に向き合ってその解決のために行動する人々は間違いなく増えている。旧山古志村でいえば、人口は半減したが、行事は倍増したし、農家民宿も農家レストランも生まれた。交流人口は倍どころか桁違いに増えている。」

5. 平成30年の初場所

1978（昭和53）年5月に国の重要無形民俗文化財の指定を受けた「二十村郷の牛の角突き習俗」（山古志・小千谷）は、今年で重文指定40周年を迎えた。節目の年にあたり、山古志・小千谷の両保存会は、伝統行事の継続のために大きな決断をしていた。

(1) 小千谷、実況解説者の世代交代

小千谷の「牛の角突き」の初場所が行われた5月3日は、実況解説者の交代が発表された。

初代実況解説者として、42年間にわたり実況解説を務めた監物伸行さん（78）が引退した。監物さんが実況解説を引き受けたのは、山古志で「牛の角突き」が復活し、東山地区の復活機運が起きたときだ。

従来は、マイクを使った実況解説は無かった。地元の伝統行事に解説は不要だったからだ。観光資源にもなるからと、分かりやすい解説で盛り上げようということになったが、引き受け手はいなかった。知識の豊富な人は大勢いたが、人前で話すことが苦手な人ばかりだった。

そこで白羽の矢が立ったのが、当時、錦鯉のセリ人をしていた監物さんだった。大勢を前にしゃべるのは比較的得意だった。運動神経に自信は無かったから勢子（闘牛士）としては活躍できなかったが、「お前しかいない」と口説かれ引き受けたそうだ。

この日の冒頭、監物さんは引退挨拶を行い、地元テレビ局の取材や古くからのファンとの対応に忙しくされていた。

3年の引き継ぎ期間を経て、マイクは木島良さん（35）に引き継がれた。木島さんは、かつて新潟のラジオ局に務め、小千谷市観光協会にも在職していた経験をかわれ、「お前しかいない」と口説かれたそうだ。いわゆる美声のイケメンであり、その知識や実況解説に、師匠の監物さんは太鼓判を押す。なお、40年以上の世代の違いは、実況に新しい風をもたらした。木島さんの実況には「さあ、アグレッシブな突きだ！」というようにカタカナ形容詞も入る。それも含めて老師匠は、次世代の実況ぶりに満足げに目を細めていた。

(2) 山古志、女性牛持ちの引回し解禁

山古志の初場所は、例年通り小千谷の翌日にあたる5月4日に行われた。この日、女性牛持ち（牛のオーナー）による牛の引回しが、初めて行われた。

「牛の角突き」では、両雄の闘いが終わる毎に、牛持ちが引綱を引いて牛と場内をゆっくり一周するのが慣例である。この引回しは、双方の牛の健闘を讃える一種のウイニングランであり、牛持ちにとっても誇らしいひと時

である。

伝統的仕来りは、取組前の闘牛場に安全祈願の御神酒と塩が撒かれると、それ以降の闘牛場は女人禁制だった。1 t 前後の雄牛同士の闘いを引き分けに持ち込む勢子の度胸と勇姿は、危険と隣り合わせであり、諸々の理由から女性を闘牛場から遠ざけていたのだろう。

新聞やテレビでは、大相撲の地方場所に端を発した土俵上の女人禁制問題と関連付けて注目もされた。しかし、これは、いわゆるジェンダーの問題とは別の文脈で辿り着いた山古志闘牛会の結論だった。同闘牛会は、この伝統行事を長年愛し活動続けてきた女性会員の希望を汲み取るか、仕来りを優先するか、議論を重ねたうえで一緒に伝統行事「牛の角突き」を盛り立てていく仲間の希望を優先させたのである。

ちなみに、女性初の引回しを行ったのは、兵庫県神戸市在住の牛持ちの方だった。

(3) 山古志闘牛会の女子部

女性牛持ちの引回し解禁の背景を訪ねると、よりその判断は自然であると思える。

山古志闘牛会には、昨年8月12日に結成された女子部がある。「牛の角突き」を女性目線で盛り上げ、愛好者を広げるために結成された。闘牛会の公式HPと並行して女子部ブログも運営されている。開催日には、揃いのTシャツで物販も行い女性観覧者にも馴染みやすい雰囲気盛り上げている。

初代部長には、長岡市内在住のMさん（当時39）が就任した。山古志との縁は闘牛会の会長を務めていた故松井治二氏との出会いからだった。松井会長は、集落の半数が河道閉塞で水没した木籠集落の区長として集落復興のまとめ役になり、集落に戻ってからは、水没した集落を眺める場所に震災交流施設「郷見庵」を立ち上げた。

Mさんが初めて「郷見庵」を訪れたのは2011

(平成23)年、闘牛場に足を運ぶようになったのは2013(平成25)年、勧めを受けて牛持ちとなったのは2016(平成28)年だという。Mさんの興味と関心を自然に導いたきっかけは、「郷見庵」であり松井会長だった。

(4) 小千谷と山古志の「牛の角突き」

伝統を共有する小千谷と山古志の闘牛場は、どちらも美しい棚田を見下ろす山の上にある。運営しているのは、各々が主業を持った方々であり、震災を乗り越えた方々である。普通の人の底力と地元の伝統文化への誇りが、闘牛場から伝わってくる。

取組終了後の雰囲気も温かく、家路につく観覧者の笑顔は「元気をくれてありがとう」、見送る勢子の笑顔は「来てくれてありがとう」と互いの感謝を交換しているように見える。

「牛の角突き」の魅力は、迫力のある雄牛の激闘、それを「引き分け」に持ち込む勢子の勇気や技量だけではない。

2018(平成30)年、山古志の初場所冒頭、勢子と実況解説を兼ねる松田さん(前編で紹介)が、約2,000人の観覧客に2つの質問をした。

「お客様のうち、山古志以外からおみえになった方は、恐れ入りますが挙手をお願いします」、すると約半数以上の人が手を上げた。

「では、今回初めて角突きをご覧になるというお客様、恐れ入りますが挙手をお願いします」、すると約半数の人が手を上げた。

この挙手の数は交流人口が増えている立派な証である。地元の方々が地元に誇りに持ち、生き生きとしている姿勢が元気をくれる。

6. まとめ

映画『マリと子犬の物語』の幼いヒロインは、全村避難後、村に残された愛犬マリを救うため、大人たちに内緒で小学生の兄と避難所を抜け出し、山道を歩き崖を登り、途中で立往生する。幼い兄妹は役場職員の父に山中



観覧者の見送り風景。
見送られる側からも感謝の言葉が聞かれる。

で救われるが、やがて、マリを救いたいという少女の強い思いは周囲にも波及していく。

この映画は、非常事態下の少女と愛犬の物語だが、それにとどまらず、新潟県中越地震で起こった大事なエピソードの幾つかを子ども目線で捉え直している。おかげで、牛との関わりが薄い筆者にも、幼いヒロインの切ない愛犬への思いを通じて、牛の救出に出掛けた闘牛会会長の思いに近づくことができる。

非常事態下で遂行された「牛の角突き」の理由を当事者たちは、「守ったのではなく、守られたんだ」と説明した。この逆説的説明には、自然や生き物に手間と労をかける営みから有形無形の豊かさを得てきた循環の摂理を知る人の含蓄がある。そして、この「守ることで守られる」という関係は、仮設闘牛場の「牛の角突き」に限らず、震災から現在に至るまで随所に発見できるように思える。

【参考文献】

- ・長島忠美・石川拓治『国会議員村長 私、山古志から来た長島です』小学館・2007年
- ・植田今日子「避難生活下の祭礼とルーティンの創造」、橋本裕之・林勲男編『災害文化の継承と創造』臨川書店・2016年
- ・植田今日子『存続の岐路に立つむら』昭和堂・2016年
- ・中越防災安全推進機構・復興プロセス研究会『中越地震から3800日』ぎょうせい・2015年
- ・「山古志復興新ビジョン」山古志復興新ビジョン研究会・2005年
- ・「山古志十年の記録」山古志住民会議・2015年

地方創生と伝統行事・「牛の角突き」補考

新潟県中越地震の記憶庫「中越メモリアル回廊」

上席専門職 平沼 浩

目次

- | | |
|------------------------------|----------------------|
| 1. 中越メモリアル回廊 | 4. おぢや震災ミュージアム「そなえ館」 |
| 2. 長岡震災アーカイブセンター
「きおくみらい」 | 5. 川口きずな館 |
| 3. やまこし復興交流館「おらたる」 | 6. 3つのメモリアルパーク |
| | 7. まとめ |

1. 中越メモリアル回廊

本編では、新潟県中越地震で被災した山古志を中心に震災当時の状況を断片的に紹介した。疎かにできない出来事の記憶であり、本編の言葉足らずを補うため、震災アーカイブ施設「中越メモリアル回廊」を紹介しておきたい。

そもそも中越地震に限らず、被災するとはどのようなことなのか、本当のところは、否応なく災禍を経験した人や直接関わった人にしか分からない。ニュース報道や様々な記録資料で伝えられる情報には、窮地に立った側と安全な暮らしの側にいた者との間に比べような温度差がつきものである。

また、当事者になって初めて経験する震災や避難所暮らしの記憶も、そこで発揮された人びとの勇気や辛抱強さや助け合いの記憶も、時間の経過や未経験世代の増加、復興の促進とともに徐々に風化していくことになる。

そうした貴重な記憶はどこかに留めておくべきであるし、出来れば、安全な暮らしの側にいる者にも疑似体験を共有できる状態で保存されることが望ましい。

長岡市、小千谷市および公益社団法人中越防災安全推進機構は、被災地域に展開する4つの震災メモリアル施設と3つのメモリアル

パークを相互に結び付けて、「中越メモリアル回廊」と呼び、震災の経験と教訓を継承し発信している。

これらの施設の構想は、被災自治体の要望を新潟県が受けとめる形で2005（平成17）年8月の「新潟県中越大震災復興計画」に盛り込まれ、震災7周年を迎えた2011（平成23）年10月23日（山古志では2013年10月23日）にオープンした。

以下、震災の記憶を保存伝承する好事例として、「中越メモリアル回廊」を構成する4つのメモリアル施設と3つのメモリアルパークの概要を紹介したい。

2. 長岡震災アーカイブセンター「きおくみらい」

(1) ロケーションと特徴

場所は、長岡市の中心街、駅前大通りに面した市役所分館2階にある。ここには、「中越メモリアル回廊」の事務局が置かれ、関連施設のセンター機能兼玄関口の役割を担っている。建物の1階には多目的文化スペースや銀行等もあり、誰もが気軽に入りやすい。

(2) 展示の特徴

展示の柱は、教室2つ分はあろうかという広さのフロアの床1面を使った2,500分の1

の空撮写真によるジオラマである。長岡市、小千谷市および周辺地域を2,500倍の巨人の視点から俯瞰できる。専用iPadを床のポイントにかざして検索すると、その場所の被災状況や現在の状況、地域の伝統文化等が写真と文字で解説される仕組みである。被災者の避難場所や仮設住宅の場所等をジオラマの上を歩幅で確認できる距離感や方向感が事柄の理解を助けてくれる。

映像シアターでは、この施設が長岡市のど真ん中にあるにもかかわらず、長岡以外の被災地域で復興に尽力した人びとの群像がドキュメンタリー映像で紹介されている。たとえば、住民避難に尽力した人（小千谷市）、震災翌日から道路復旧に尽力した建設業者（小千谷市）、東日本大震災の復興ボランティアとして活動する牛の角突き保存会（小千谷市）などである。

また、震災関係の図書資料を備え、防災学習会のために語り部を確保し要請に応える体制をとっている。

3. やまこし復興交流館「おらたる」

(1) ロケーションと特徴

長岡市山古志支所（旧村役場）に隣接している。1階は地域の観光案内所も兼ね、2階が震災メモリアル施設になっている。

2階の床は山古志復興の年表になっており、奥に進むにつれ出来事を遡り2004（平成



「おらたる」全村避難の展示ゾーン。

16) 年10月23日に近づき、逆に入口に戻るにつれて年表は現在に近づく。つまり、過去と現在を往来する空間になっている。「おらたる」とは、土地の言葉「私たちの場所」に由来する。

(2) 展示の特徴

展示の柱は、被災、被害、全村避難、避難所生活、仮設の闘牛場等のテーマゾーン毎の報道写真群と、そこに大きく添えられた1人20文字程度の被災者の生の言葉である。

自衛隊の空挺部隊や海上保安庁等のヘリコプター、崩落した道路の様子、死に倒れている牛の様子等が生々しい。添えられた言葉には、居住地域・職業・実名等が記されており、言葉の重みを増している。また、テーマゾーン毎に配置されたモニター画面をタッチ検索すると、背景事情が詳しく紹介されている。

仮設住宅の1室を保存した畳部屋には、ボランティアからの励ましの寄せ書きや、寄贈された冷蔵庫、住民座談会に使われた復興ビジョン資料などが展示されている。

特殊な鑑賞装置としては、地形模型シアターがある。周辺地域の地形模型にプロジェクションマッピングの映像と音声解説が加わる。約300万年前に海だった時代からの地形の変遷と地質や気象の特徴が解説され、新潟県中越地震発生メカニズムや被害状況、急ピッチに進められた工事の概要を解説している。

地形模型シアターを見せてくれた女性係員が、アドリブのクイズを出してくれた。

「さて、このフロアの写真パネルに私も写っています。どれでしょう……。実は、ここに並んでいる小学6年生が私です」

それは、今まさに自衛隊のヘリコプターに乗り込もうとする人びとの写真だった。彼女は、このちょっとしたやりとりで展示されている過去の時間と現在を結び付けてくれた。

4. おぢや震災ミュージアム 「そなえ館」

(1) ロケーションと特徴

場所は、小千谷市中心街からやや山側に位置する小千谷市市民学習センター2階にある。

ここでは、地震や余震の怖さを実際に身体で疑似体験できるほか、避難所生活を具体的に目の当たりにすることができる。

(2) 展示の特徴

地震体感シミュレーションは、ソニーが映画エンターテインメント用に開発したMX4D方式を採用し、昨年4月に国内文化施設で初めて導入したものだ。3D映像にマルチ音響と震動する座席シート、吹き込む風や煙、倒壊する木造住宅の臭いまでも再現している。従来の体験型起震車では、横揺れしか再現できないところを、このシステムでは地震と余震の震動を縦横斜めの揺れで体感できる。立ってられない状況を座って体験できる。

もう1つの特徴は、避難所生活の様子が具体的に再現されている点である。小千谷市では、山古志のような大がかりな救出劇はなかったものの、頼りとなる避難所は不足していた。3,000人の被災者を1度に収容した体育館の光景を紹介した特大写真パネルは、観る者を体育館の入口に立った気にさせる。

また、ガラス破片が飛び散り避難所に使えない体育館を避けて、農家のビニルハウスを



「そなえ館」ビニルハウス避難所のリアルな再現。
人物含めて後方は写真、手前の展示物は実物。

避難所にした光景。学校のグラウンドで自家用車を避難所代わりにした光景。そうした大型写真パネルを奥行きに、手前側には飛び出す絵本のように、避難時の物資やら道具やらが生々しく再現されている。

この施設は、小学生向けの防災教育ゾーンを備え、防災教育施設としての機能も持っている。小千谷市は、中越地震の半年前に東京都杉並区と災害時支援協定を結び、杉並区民が被災した際には避難も含めて小千谷市が支援することとしていた。しかし、実際には、杉並区から支援を受ける側となった。そうした縁から東京都杉並区の小学校をはじめ、東京や県外の小学校の防災学習を受け入れている。

5. 川口きずな館

(1) ロケーションと特徴

川口地域は、中越地震の震源地となった場所である。震災当時は川口町だったが、後に長岡市と合併した。施設は、越後三山を南にのぞむ風光明媚な公園にあり、他の震災メモリアル施設とはやや趣が異なる。

長岡の「きおくみらい」を「中越メモリアル回廊」北端のスタート地点と見立てれば、「川口きずな館」は最南端に位置し、回廊のいわばゴール地点にあたるのかもしれない。

(2) 展示の特徴

山小屋風ロッジの施設スペースの中心は、美しい越後三山をのぞむ眺めの良いくつろぎのカフェであり、来訪者と地元の方との語らいと交流の場をコンセプトにしている。

震災メモリアルという点では、フロア北側の壁面に震災復興の年表と報道写真のパネルが、東側の壁全面に大きな空撮写真が張られている。係員は、飲み物の注文を受けながら気軽に質問にも応じてくれた。

窓側で紅茶を飲みながら手芸をする方もいれば、取材の打ち合わせをしている方もいた。

6. 3つのメモリアルパーク

○妙見メモリアルパーク

信濃川に面した県道589号・小千谷長岡線沿いで、2台のクルマを巻き込む大崩落のあった場所である。メモリアルパークとはいっても大きな公園ではなく、復旧した道路の脇に設けられた哀悼の場所である。犠牲者を悼む献花台と「大地のくさび」と名付けられた鉄杭が2本立っている。レスキュー隊によって92時間後に発見された被災車両からは、2人の親子の死亡が確認されたが、奇跡的に幼い男の子が救出された場所でもある。

○木籠メモリアルパーク

山古志の^{こごも}木籠集落は、その過半が芋川の河道閉塞により水没した場所である。新たに架けられた橋の下には、2軒の家屋が1階部分を土砂に埋まった状態で保存されている。

このうちの1軒は、山古志闘牛会の会長を務めた故松井治二氏の自宅だった。その松井氏が、水没した集落を眺められる場所に、来訪者と集落住民の震災交流施設として立ち上げたのが「郷見庵」である。現在はご遺族をはじめ地元ボランティアが引き継ぎ、積雪期間を除き運営されている。「郷見庵」1階は、地元素材を使った手作り食料品や民芸品を販売する小さな道の駅風であり、2階は復興資料などが見られる畳の集会場になっている。

集落の人口は減っても町場の人との交流があれば集落は滅びないという故松井氏の志を知って訪れる人も、知らずに訪れる人も、表情は優しく見えた。

○震央メモリアルパーク

新潟県中越地震の震源地ポイントである。川口地域の棚田や周囲の風景は山古志とよく似ている。メモリアルパークは、震源地である棚田を真下に見下ろす、家1軒分ほどの僅かなスペースである。記念の支柱には、地元

の小中学生による手書きのメッセージが書かれている。積雪期間は、雪に覆われるため通行止めとなる。

7. まとめ

「中越メモリアル回廊」は、施設毎の特色が相互に補い合う形で災禍の記憶を伝える記憶庫の役割を果たしている。

長岡から、山古志、小千谷、川口と巡るうちに、歩幅で感じた「きおくみらい」の2,500分の1ジオラマを実寸で体感することになり、自然に距離と風景も五感に馴染んでくる。

ただし、事柄の性格上、訪れる側の関心と想像力が試される施設でもある。各施設の係員は、その辺を心得ていて質問には真摯に応じてくれる代わりに、来館者に自分から説明を押し付けることをしない。施設の係員は、かつての被災者でもある。

その何人かに不躰を顧みず「地震のときは何をされていましたか」「怖かったですか」の2点の素朴な質問を試みた。すると、来館者と係員という余所余所しい関係は、ひょっとすると立場が入れ替わっていたかもしれない関係に近づいた気がした。ある方は、10数年前の記憶を昨日のここのように明瞭に話してくれた。「そりゃもう、怖かったですよ」と淀みなく言葉が返ってきたのは、何度も自身の記憶を反芻しているからだだろう。質問を投げかけた全員から瞬間的に返ってきた言葉は、「恐怖」と「不安」の2つだった。

時間経過にともなう記憶の風化に抗する究極の手段は、かつての被災当事者に記憶を現在化してもらう生の語りではないかという印象を強く受けた。しかし、それもこうした施設基盤があってこそ、記憶伝承の接点が生まれるのではないだろうか。